

読書感想文優秀作品

第61回青少年読書感想文岡山県コンクール
高等学校の部 入選（自由図書）

私と私の友だち

二年一組 金 田 野乃花

「友達になろう」「ずっと一緒にいようね」「だって、うちら友達でしょ」。たわい無い会話と黄色い声に包まれた中にいる私の笑顔が浮かぶ。その一方で「友達なんかじゃない」。自ら友達の輪の外に出た私の姿が思い起こされ、嫌な記憶が蘇る。

私には、小学校時代の学級崩壊をきっかけに心を閉ざしてしまった経験がある。当時、仲の良かった友達が問題を起こしたことが酷くショックで、人間不信になってしまったのだ。それ以来、友達付き合いに自信を失ってしまった私の中には「もう一人の自分」が存在しているような気がする。地元の中学校ではなく、中高一貫校を選んだ私は、入学してからもなお、「友達なんかじゃない」と心を閉ざし続けた。当然ながら、そのころの私には友達がいなかった。だから、交通事故をきっかけに「みんな」の輪から出て行った恵美ちゃんの姿に親近感を覚え、自分を重ねながら読み始めた。

この物語の登場人物は、すぐに私の周りの人達に当てはまった。クラスのリーダー格である万里ちゃんや歌手ちゃんのような人は何人も見つけることができたし、堀田ちゃんのような

八方美人も必ずいた。また、普段はとても仲良く見える二人が、裏ではお互いの悪口を言い合う。彼らが繰り広げる世界はリアルで、私の学校生活の中でも似たような場面があった。私が中学校で初めて友達になった子とは、今は会話すら無いのに、第一印象からして、気が合いそうにないなあと感じていた子と、今では一番仲が良かったりする。また、堀田ちゃんの行動に、「私なら絶対そんなことしない」と断言できるのに、内心、人気者になりたいとか、この子には嫌われたくないと思う自分が存在する。読み進めていくうちに、友達だけでなく、「自分」というものすらわからなくなってくる。それでもなお作者は、八人の「きみ」を通して、「友達とは何か」という実にシンプルで不可解な難問を、何度も私に問いかけてくるのだった。

幼い頃、花いちもんめで指名された時の喜びは尋常ではなかった。たとえ指名されなかったとしても、誰もが胸を弾ませ、その瞬間を待ちこがれていたはずだ。いつからだろう。楽しかったはずの花いちもんめが、「ひとり」対「みんな」になってしまったのは。どうしてだろう。みんなの側にいれば大丈夫、みんなと一緒に安心と思う人が増えてしまったのは。楽しかったはずの学校で、花いちもんめが、「みんなと違う」ことを除外するようになってしまったのは。

『みんな』って嫌いだから』と言った恵美ちゃん。彼女の冷たく、容赦ない口調は何人もの人達を傷つけたかもしれないが、同時に、彼女の生き方や言葉に癒され、勇気づけられた人達だって大勢いたはずだ。そして、恵美ちゃんは、『みんな』の輪から外に出たことで、由香ちゃんという大切な「友だち」に出会うことができたのだと思う。

恵美ちゃんと由香ちゃんの間には、私にとっては友達の理想

時、私の『ねじれの位置』にいるのは、一体誰なのだろうか。
重松 清 著『きみの友だち』

的なかたちだが、ブンとモトくんのような関係もとても素敵だ
と思った。たとえ目指す目標や方向が違っても、お互いを客観
的に見つめ、見守っているような関係―。接点も共通点も無
いのには、お互いを認め合うことができる―。『ねじれの位置』
とは、そういう間柄のことなのではないかと思う。

保育園の先生は、「おともだち」という言葉を頻繁に使った。
おもちゃの取り合いになった時も、「おともだちと仲良く使お
うね。」という魔法のようなおまじないで、私達はすぐに仲直
りできた。誰が友達か否かなどと考えるはずもない。いつから
だろう。「友達」という言葉が計り知れない意味を持ち、グルー
プという単位になって、私達をこんなにも苦しめ、支配するよ
うになったのは。

現実の中で、圧倒的に少人数のタイプの恵美ちゃんと私。最
初、恵美ちゃんと私は、どこか似ているなと思った。しかし、
私は恵美ちゃんの足元にも及ばなかった。由香ちゃんが亡く
なった時にも「不思議と悲しくなかった」のは、「一緒にいな
くても寂しくない」本当の友達を得たからだろう。そんな強く
凜とした恵美ちゃんに、やはり私は憧れる。私なら泣く。絶対
に泣く。親友が亡くなって悲しくないわけがない。こんな私に
恵美ちゃんは、『わかってない』と言うのだろうか……。

何がきっかけで友達になったのか、どうして今も友達を続け
ているのか、そして本当の友達とは何か。本を閉じた今も、そ
してこれからも私はこの問いに悩み続けるのだろう。

携帯から目を外し、空を見上げて『もこもこ雲』を探す。友
達になるのに理由も理屈もいらない。あの雲のように様々なか
たちがあつていいと思う。自分を繕ってみたい、変に意識する
必要もない。今はただありのままの自分でいようと思う。その